

カチョルさんとの再会

霜田 英麿

一昨年8月まで札幌コンサートホール *Kitara* の専属オルガニストを勤められたマリア・マグダレナ・カチョルさんが札幌でのコンサート(7月4日)などを終えて東京へ戻られたときに、在京会員の熊倉ハリナさんともにお会いしました。

実は、今回の来日前、東京のサントリーホールで7月(実際は6月)25日に演奏会を行うとのメールを頂いておりましたが、とても残念な行き違いが重なってお聴きすることができませんでした。

それでも、カチョルさんの帰国の日の7月12日に東京で、*Kitara* の篠原さんと長谷川さんとご一緒にお会いすることができました。カチョルさんは専属オルガニスト時代も観光らしいことは一切していないので、お二人が今回、最後の日ぐらいは東京を案内したいと思って同行されたそうです。

その日は梅雨明け間近のとても蒸し暑い日で、日本橋の老舗の鰻屋に予約もなしにタクシーでご案内しましたが、長い行列でした。彼女は食後にも音楽関係者との打合せがあつて、直ぐに元の歌舞伎座へ戻りましたが、長谷川さんの機転で、歌舞

伎座近くの「銀の塔」という老舗の洋食屋さんで定番のビーフシチューを頂くことができました。出来たてのシチューはとても熱いのに、30分後にせまった打合せ時刻に間に合うよう、カチョルさんを急かせてしまって悔いが残りました。

短い時間でしたが、カチョルさんは日本が大好きで、ハリナさんも旧交を温めて、とても素敵な時間を過ごすことができました。篠原さん、長谷川さんありがとうございました。

(しもだ・ひでまろ、東京事務所)

写真：歌舞伎座前で(左から)篠原さん、カチョルさん、ハリナさん、筆者、長谷川さん



《新会員のひと言》

新井藤子と申します。

現在私が行っている研究は、ブロニスワフ・ピウスツキの業績の一つにある博物館活動のうち、彼が博覧会展示、博物館展示にどのように携わったのかということの検証です。最終的にはピウスツキの携わった展示を復元し、博物館をチャンネルとした視覚情報として観覧者に広く発信して、ピウスツキの業績を再検討、再評価する新たな手立てを確立することを目標にしています。

2013年10月には、顕彰事業の一環として、白老のアイヌ民族博物館の敷地内にピウスツキの胸像が建立されましたが、日本国内における、日本とこの人物とのつながりへの認知度は、現在それほど高くはないように見受けられます。



日本におけるピウスツキの業績研究は、井上紘一先生や沢田和彦先

生などのご研究をはじめとして、人物像や評伝の構築、すなわちピウスツキという一人物の生涯をポーランドやロシア、日本などの歴史上に復元し、民族学者としての像を確立させたという功績にその意義を有していると言えます。

今後、胸像のもとを訪れる人々に、ブロニスワフ・ピウスツキという人物をよりクリアに知ってもらうためには、ピウスツキの研究成果や博物館活動が、具体的、視覚的にはどのような様相のものであったのかを提示してゆく必要もあると思います。その提示を行うことは、次世代研究者としての自身の役割であり、なかでも、ピウスツキの携わった博物館展示を復元することは、彼の業績を視覚的、具体的に認知してもらうのに非常に有効であると考えます。

このような話になるとつい熱くなってしまう、言動を爆走させるたびに周囲の温厚な方々に助けていただいている私です。これにあきれず以後、どうか仲良くして下さいませよう、何卒宜しくお願い申し上げます。(あらい・ふじこ)